

『流言』考

—張愛玲・1943～45年—

Study on “Liu Yan” (Rumor)

Eileen Chang・1943～45

池上 貞子*

Sadako Ikegami

はじめ

筆者はかつて、張愛玲研究の手始めとして、小説集『伝奇』（1944.9）に関する考察を試みたことがある^①。その後入手した資料や情報により明らかになった点、また付加すべき事実関係も少なくないが、「内に持つ、あまりにも伝統的中国的な父の世界と、それを見つめる外国人的現代人的母の世界、この二つの世界の接点に張愛玲の文学は生まれた^②」すなわち「中国と西洋の接点」という、彼女の文学の本質に対する捉え方は今も変わっていない。

ところで、後にふれるように、張愛玲の人生の中で、文学活動のピークがいくつかあるが、その第1期は日本占領下の上海時代つまり刊行物に作品が掲載され始めた1943年初から1945年夏の日本の敗戦までということが言える。この時期の彼女の代表作としては、中・短篇小説集である『伝奇』とともに、散文（評論、随筆）集である『流言』（1944.12）の存在は切り離せない。時期を同じくするこの二書は、その時代の彼女の文学総体として表裏一体を成すものであり、また彼女の文学上の出発点として、その後の文学活動や作品そのものの源流であろうことが考えられる。本論では『流言』に収めら

れた作品を中心に、その前後の作品や周辺の事情について考察し、現在に至るまでの彼女の文学人生における意味を探ってみたい。

I. 所収作品の原載誌とその性格

1941年12月、太平洋戦争の勃発は、香港大学に学んであと一年足らずに卒業を控えていた張愛玲の人生を変えた。上海の聖マリア中学に在学中からその文才を^③を注目されていた彼女が文学的野心をもっていたことは、雑誌の懸賞で3等をとった「天才夢」によっても知られる。1939年香港大学在学中に書かれたと思われるこの文章は、『西風』1940年4月16日号に掲載されたが^④、フィクションの部分を含むにしても、他の資料から知られる彼女の半生に対応する事柄も多く、自伝的要素が強い。

その概略を述べると、子供の時から天才と目されていた人物も、大人になると「天才の夢」しか残っていないと謙遜しながらも、3歳で唐詩を暗誦したこと、7歳で2篇の小説（1篇は家庭の悲劇をテーマに、1篇は失恋して自殺した女のことをテーマに）を書いたという。そして8歳ではユートピア風の小説「快樂村」を書いたが、その頃はいつもノートを持ち歩いて文章を書きとめたり、スケッチを試みていたよう

* 一般教育等

だ。9歳では画家になるか音楽家になるか迷ったというが、それらを触発した素地は、文章を書く時、色彩の濃淡とか、音色で表わす習癖を養ったらしい。16歳の時に母親がフランスから帰国して、家庭的な日常の生活習慣のことなどをしつけられたが、あまり効果が上がらなかったという。

以上の内容はともかく、タイトルと言い、こうしたテーマで書くこと自体、かなり自己の才能に頼むところがあることを窺わせる。聖マリア中学時代の国語教師、汪宏声はこの文章を読んで、彼女に童話を書くことを勧めたと言う。生活経験は乏しいが、想像力に富んでいるので、最適なのではないかと考えたのだそうだ。

1941年12月に香港が陥落すると、大学堂臨時病院なる所で看護婦のようなことをしたり、ロシア人に日本語を習ったりして時を過していたが、ついに上海に引き上げる。恐らく1942年春のことと思われる。そして、汪宏声の言によれば、聖ジョーンズ大学を受験するが、中国語が不合格のため、補習班に入ったという。上海に戻ったあとは、フランス租界静安寺路の高級アパートに住むお婆の所にころがり込んだらしい。父親とは4、5年前の監禁事件以来すでに絶縁状態であったろうし、母親はその頃シンガポールに行っていて、太平洋戦争勃発以後は行方不明になっていたようだ。

この頃から主に生活のためだと思うが、彼女は英文雑誌《The XXth Century》(『20世紀』)を中心に、中国文化紹介や映画評を書き始める。詳細は付録の年譜1943年の頃あたりを参照されたい。

ところで日本占領下の上海では様々の傾向の雑誌が出され、後述するように張愛玲はそれらのいくつかと係わりをもつ。彼女はそれらの雑誌にどのような経過を経て、文章を載せるようになったのだろうか。また、彼女の作品を載せたそれらの雑誌は、どのような性格のものであったのだろうか。断片的ながら探ってみる。

まず《The XXth Century》は1941年10月に上海で創刊。編集長は Klaus Mehnert という

モスクワ生まれのドイツ人だ。彼はベルリン大学の学位を得たあと、モスクワの駐ソ記者を得て、日中戦争が始まった頃からカリフォルニア大学、ハワイ大学などで教鞭をとったあと、1941年日本経由で上海に来ていた。彼が上海《The XXth Century》を発行した理由について、張愛玲研究者の一人鄭樹森は4つあげている⁵⁾。1、国際情勢の変化すなわち世界大戦の波は、ヨーロッパの出版界に空白状況をもたらす一方で、読者の視野を拡大することになった。アジア在住の外国人の間でもそれに見合う物の出現が熱望され、とくに上海の租界に住む人たちが主な対象として考えられた。2、国際都市としての上海は様々の勢力の括弧つきの「平和共存」の場となり、そのことは逆に情勢の客観的な分析を可能にした。3、上海在住の外国人記者や作家、カメラマンなどの失業対策的意味、少なくとも彼らに活動の場を与える意味もあり、例えば創刊号には8ヶ国の人間が係わっている。4、Mehmert 自身の熱意。ただし筆者にはもう少し組織立った背景があるのではないかという気もするのだが、今までのところはっきりした根拠は得ていない。1945年5月、ヨーロッパ戦が終結したのを機に、該誌はその年の6月号をもって停刊した。1943年頃からは徐々にファシストの文章も載せるようになったと評されている。

張愛玲が該誌に文章を寄せるようになった詳細は不明だが、聖マリア中学時代、香港大学時代を通じて英語で文章を書く教育を受け、またそのことに巧みであった彼女にとって、あまり突飛な、不自然なことではなかったにちがいない。

最初の文章“Chinese Life and Fashion”(1943. 1)からすでに、「直に中国人を目のあたりにしつつ、しかも自己に中国人を内在させながら、外国人の目でこれらを見つめるという図式⁶⁾」がそこにある。これは中国に暮らす外国人たちにすこぶる受け入れられやすいものであったろうと考えられる。付録の年譜からも見てとれるとおり、彼女はこの年5月以降毎月号

に映画評を、そして1月、6月、12月に中国人論および中国文化論風の評論を寄せた。Mehnert は各掲載文の巻頭に、彼女のヴィクトリア朝風の美文を讃えるコメントを付している。

張愛玲の英文誌への投稿はこの一年で終わっており、その後は中国語の雑誌が中心になる。年譜からも分るように、これは『紫羅蘭』1943年5月号に載った処女小説「沈香屑第一炉香」がかりなの評判になり、それまでに書きためていたものが矢継ぎ早に発表され、話題になったことによると思う。

張愛玲の中国語作品の出世作とも言うべき「沈香屑第一炉香」が『紫羅蘭』に載った経緯については、編集長の周瘦鵑が、翌月号に掲載した「第二炉香」の前に、コメントを付している。

それによると、1943年春、まだ肌寒い頃、黃園主人岳淵老人の紹介だとして、周は張の突然の訪問を受け、原稿を見せられた。当時周は、自身が1922年より刊行し、一時停刊していたいわゆる鴛鴦蝴蝶派（狭義には恋愛小説、広義には通俗小説）の文芸雑誌『紫羅蘭』の復刊を考えていたのだった。ちなみに張の母やおばは『紫羅蘭』を始めとする、周の編集していた雑誌の愛読者だったらしい。周は「沈香屑第一炉香」を高く評価し、そこにモームや「紅樓夢」の影響を見ている。『紫羅蘭』1943年5月号に載ったそれがすこぶる好評であったので、続いて「沈香屑第二炉香」を掲載した。張愛玲は単行本化を急いでおり、「第一炉香」、「第二炉香」とも一挙に掲載されることを望んだが、長いので2度に分けた。

周瘦鵑は鴛鴦蝴蝶派の作家とされているが、現代中国文学史の研究者劉心皇は、雑誌『紫羅蘭』が月刊から後に不定期刊になったことについて、「これは鴛鴦蝴蝶派の時代が確実に過去のものとなったことを証明するものだ⁷⁾」と言いつけている。

ところで劉心皇は、専ら日本占領下の時代と地域の文化状況についてまとめた『抗戦時期淪

陥区文学史』（台湾・成文出版社、1980.5）において、それが以下のような主旨で書かれたことを明記し、抗日戦線に加わらなかった作家や刊行物を一律に指弾している。

八年間の抗日戦線は中国近代史上空前の時代であった。中華民族の辛苦に耐えて奮闘する精神と、中国人の権威暴力に対する不屈の意志は、ともに全民抗戦の偉大な行動のうちに、一つ一つ表現されてきた。

しかしながら、この偉大な抗戦の時期に、ほんの少数の民族的裏切り者、残滓は、敵に投降して民族の利益を売り渡すに役立つ漢奸（売国奴）偽政権を組織した。敵に投降し、偽政権についた墮落作家（原文“落水作家”……水に落ちた作家、敗残者）は、日本占領地域の人民や青年に、著しく麻醉的な影響を与えた。抗日戦争勝利からすでに35年の久しきになるが、これら一部分の墮落作家については国内外ともにきちんと記録した専門書がまだない。ここでは特にこれら一部分の墮落作家の警戒し、もって戒めとなすべき事蹟について資料を蒐集し、本書を編んだ。そして「宋史」「臣伝」「清史」「貳臣伝」の意あるところを主旨して、抗日戦争期の日本占領地域の文学について簡単に論述した⁸⁾。

同書は、張愛玲が関連したその他の雑誌について、以下のようにコメントとしている。まず、張愛玲が香港シリーズとして「沈香屑第一炉香」「第二炉香」と同列に考えている「茉莉香片」や代表作「金鎖記」などを載せた『雑誌』について、「新中国報社」の社長袁珠が主宰し、呉江楓が編集する月刊誌。ちなみに袁珠は日本留学帰りで、情報工作に従事していたことがある。新中国報社のバックは汪精衛政権の人物周仏海であり、『雑誌』を含めた新聞や雑誌の刊行は、汪政権のかなり直接的な文化事業の一つと考えられる。上海事変の時すでに創刊していたが、途中停刊し、1941年に復刊した。その特長は政治外交などの硬脈の文章はなく、他の様々の文

章を含む。現地レポート、人物評のほかにも、よく特集を組んだり、座談会の記録を載せたりしている。

また「心経」から始まり、後に、「金鎖記」の作者の作品としては失敗作と評され⁹⁾、様々な議論を呼んだ「連套圈」を連載した『万象』については、かつて鴛鴦蝴蝶派のものだったとしながらも、「とくに『万象』は販路も最も広く、柯霊が編集長となってからは、新文芸の息吹が濃厚になってきた。雑感文と長篇小説にその特長がある¹⁰⁾」としている。劉心皇が「左傾化の道をたどった¹¹⁾」とする柯霊は、映画の脚本関係などでその後も大陸で活躍している人である。彼が日本占領下の上海に残ったのは、組織的、計画的な意図があったのだと思う。1980年代になって、張愛玲を懐かしむ文章を発表しているが¹²⁾、その中で張との出会いについて触れている。それによると、『紫羅蘭』に載った作品を読んで彼女を探していたところ、1943年7月、『万象』の編集室に本人が現われて、新聞紙に包んだ「心経」の原稿を持ち込んだのが始まりだという。

張愛玲は先に述べた『雑誌』や『天地』『苦竹』などにかかなりの数のエッセイを寄せている。『天地』1943年10月創刊は散文小説の月刊誌として知られ、編集者趙和儀とは、当時張愛玲と並び称された女性作家蘇青のことであった。汪政権の実力者陳公博と特殊な関係にあったと言われ、自らの離婚体験など私生活を文学化する大胆な女性であったらしい。

『苦竹』1944年11月創刊は、汪政権の幹部であった胡蘭成の編集による。張愛玲は1944年の初めごろ胡と知り合い、日本敗戦後、文化漢奸狩りを逃れて胡が潜伏するまで、愛人関係にあった。当時これは知る人ぞ知るスキャンダルであったらしく、胡蘭成の方は当時もその後もその著名の中でかなり彼女に言及しているが¹³⁾、張愛玲の文章の中にはほとんどその痕跡は見られない。いずれにせよ『雑誌』といい、『苦竹』といい、汪政権およびその背後の日本との深い係わりは否めない。

先に述べた『万象』の編集長柯霊は、当時彼女の身を置いていた状況について、次のように回顧している¹⁴⁾。

張愛玲は創作の上でたちまち輝しい高峰に登りつめ、同時にあっと言う間に上海で話題の人物になった。このことは私を喜ばせる一面で、はらはらもさせた。環境が特殊で清濁が分ちがたかったから、とても動物園で社交ダンスなど踊る値打ちはなかった。当時懸命になって彼女に拍手喝采を送っていたのは、怪しげなバックをもつ新聞雑誌で、文学に興味があったのではなく、自分たちが見栄をはるためであった。

上海陥落後、文学界にはなお少数の尊敬すべき先輩たちが留まって隠れ住んでいた。彼らの大多数は張愛玲の発見を喜んでいたが、張愛玲本人は当然そのことを察する由もなかった。

鄭振鐸¹⁵⁾は名前を隠して、生活を切りつめ、祖国の典籍を買い集めていた。個人の限りある力でもって、自国の文化遺産が海外へ奪い去られるのを防ぐことに努めていたのだ。彼は私に所かまわず作品を発表するのをやめるよう、張愛玲に忠告しろと言った。そして具体的に、彼女が文章を書いたら、開明書店に渡して保管してもらい、開明が原稿料を払って、平和な時代になってから印刷発行すればよい、と提案した。当時、開明の編集責任者である葉聖陶¹⁶⁾はすでに一家をあげて重慶に移っており、夏丐尊と章錫琛らが上海に留っていた。店には文化界の長老グループがたむろしていて、編集者とは名ばかりで、実際はそこで翰晦し、雨風を避けていたのだった。王統照、王伯祥、周予同、周振甫、徐調孚、顧均正ら諸氏もみな然りだ。

ところで私は張愛玲に対し、つき合いは浅いので、懇切な話をするというのも具合が悪く、唐突な感じだった。うまい具合に、間もなく私は彼女から手紙をもらった。平襟垂（『万象』を発行していた中央書店の店主…

引用者注)が彼女のために小説集を出したがつているのだが、私を信頼して意見を求めてきたのだ。上海の出版界にはかつて「八掛け」本というのがあって、専ら古書や通俗小説の類の復刻を行っていた。質は悪く、ただ値段が安いというだけで売れていた。中央書店はこれで一家を成したのであった。

私は渡りに舟と、張愛玲に店の図書目録を送り、参考にさせた。そして、もし私だったら、むしろその好意を婉曲に断わるのだが、と説得した。私は言葉を尽くして、彼女の才華をもってすれば、世に出ないはずはないのだから、静かに時機を待ってほしい、あわてて功を求めてはいけない、と述べた。彼女の返事はすこぶるあっさりしたもので、自分の主張は「鉄は熱いうちに打て」だと言っていた。彼女の最初の創作集はこうして誕生した。それがすなわち『伝奇』の初版本で、出版社は「雑誌」社だった。私は内心がっかりした。早くからそうと分っていたら、中央書店の話を進めるべきだったのだ。

II 作品の分類と内容

『流言』の初版は、1944年12月、中国科学公司⁹⁷より出版された。30篇の“散文”（評論や随筆）と本人の筆になる人物スケッチや本人自身の写真などから構成される。所収作品の中には、同じ月か、1、2ヶ月前に雑誌に発表されたばかりの文章も含まれており、単行本の出版をかなり急いだ様子がうかがえる。

所収作品は付録2の一覧表のとおりだ。今これらを作者の創作する姿勢という観点から分類すると、以下のように分けられる。A評論……あるテーマについて紹介したり、論評したもので、作者の私的要素の少ないものをA-1とした。以下ともに、表2の備考欄に付してある。また作者個人の係わるエッセイ的要素の強いものをA-2とした。B創作論……作者の創作上の姿勢や態度を示したもの。C自伝……作者の生い立ち、個人史に係わるもの。D身辺雑記……

作者が日常生活でふと目にし耳にした情景や人物の描写。およびそれに関する若干の感想。

さて各項について大まかな特長や傾向を探ると、A項の評論の初期の作品は、原文がほとんど英語で書かれ、外国人に対し、中国人や中国文化について紹介するという視点に立つ。「更衣記」（原題 Chinese Life and Fashion）は主として中国近現代の女性の服装の歴史、「洋人看京戯及び其他」（原題 Still Alive）は、人生とは素人（洋人すなわち外国人）が京劇を見るようなものという主張の下に、中国人の性格や生活哲学について述べる。また「借銀燈」（原題 Wife, Vamp, Child）および「銀宮就学記」（原題 China: Educating the Family）は共に映画評であって、前者は「梅娘曲」「桃李争春」という映画について、後者は「新生」「漁家女」について論じながら、結局は外国人に対し、中国人というものについて語っているようなところがある。一方「談女人」「忘不了的话」「談跳舞」「談画」「談音楽」などは1944年になってからの作品で、最初から中国語で書かれた。書物や英国系の教育を受ける中で親しんできた欧米の文化に対する教養や知識と、当時彼女が身を置いていた状況からして比較的身近にあったと思われる日本の物事の影がうかがえる。「談跳舞」では日本の娯楽映画について論じていたり、「談画」の中では「セザンヌとその時代」という日本版の画集を参考にしたことなどに触れている。ちなみに当時彼女と愛人関係にあった胡蘭成の著書にも、二人で一緒に画集を見たことへの言及がある⁹⁸。

総じて言えば、外国人に対しては中国文化や中国人について論じ、中国人（中国語読者）に対しては、外国との比較の上で語るという、自己を含めた三角形の構図が成り立っている。このことは彼女の文学の本質に係わるものであり、後に香港を経てアメリカに渡った後も、英語と中国語で文学活動を続けていくという行程と、相関関係を成すと言うことができよう。このことはまた、私生活と関連づけた生活哲学論とも言うべきA-2項の作品群についても同様のこ

とが言える。中国人の名前について論じた「代也正名乎」はもちろんのこと、「造人」「打人」なども中国人の物の考え方、生活癖を話題にしている。自己を介して香港人と上海人の違いについて語る「到底是上海人」ももちろん先に述べた構造を成している。

B項の創作論の中で、「走，走到楼上去」はとくに演劇というか脚本に関するもので、A-2の要素もあるが、広い意味の創作に対する態度ということで、とりあえずここに入れた。「存稿」は12, 3歳の頃からの自分の創作歴で、「写甚麼」では、文学作風は外からこうあるべきと決めるより、“文人”の存在がまずあって、その人が書くことによって自ずと定まってくるという考えを示している。「詩与胡説」では、同じく日本占領地区に留っていた周作人や路易士などの訳業や詩作について語っているが、そこから中国に対する愛情について触れている部分は、その後の彼女の人生を考える時、幾分皮肉でもある。つまり、「だから中国に生きることは、ことほど左様に愛すべきことなのだ。汚れ、乱れ、悲しみ憂いに満ちた中国の至る所で珍貴なものを発見でき、午後中、いや一日中、一生楽しく過してしまおう」と言い、外国の美しさや清潔さに触れ、そういう所に住みたいというお婆のことを引き合いに出して、「もしも私だったら、中国を去りがたい——家も離れる前から、ホームシックにかかってしまう」と述べている。

ところで彼女の文学に対する考え方とか、創作態度が最も端的に表われているのが、「自己的文章」だ。これは次章でも更に触れるが、迅雨「論張愛玲の小説⁹⁾」に対する彼女の返答だとされている。迅雨はこの中で、彼女の出現を奇蹟とし、その心理観察、文学上の技巧、想像力における並々ならぬ才能を高く評価しながらも、“才華最愛出売人”（才華は人間性を売り渡しがち）だから、自己慢心を起こさぬよう、「文学の女神の貞潔」を汚さぬようと、作風そのものおよび彼女を取りまく環境のうさんくささに警告を発している。しかし、柯霊の言葉

ではないが、「張愛玲の反応は一篇の随筆を書いて、のりりくらり事にかこつけて自分の意見を述べているが、実質はたいそう無礼にノーと答えている。かなり前の文壇に1つのジョークが流行した。それは、〈女房は他人のがよいし、文章は自分のがよい〉というもの。張愛玲のその随筆のタイトルは“自己的文章”（自己的文章）」というもので、後の散文集『流言』に納められた¹⁰⁾

彼女は「自己的文章」の中で、〈文学理論は文学作品の後から生まれるものだと思う。自分はその方がより真実に近いと考えるから、不揃いのものを対照する創作法を好む。そのため勧善懲悪ともならないし、霊と肉の闘いもないので、主題が明らかでないと思われるのかもしれない。また登場人物も不徹底な人間が多い。そして一般に「時代の記念碑」と言われるような作品は自分には書けないし、書こうとも思わない〉というようなことを述べている。

彼女が自己の文学を上記のように規定していたことについては、次章で論ずるように、敵の占領下という特殊な時代と場所に対する彼女なりの見方があったと考えられ、それはまた前章に述べたように、彼女が成果を上げることを急いだ一因もあるように思われる。

C項に関しては、付録1の年譜（第1稿）に吸収されているので、ここでは論じない。ただ「私語」が幼ない頃からのいわゆる生い立ちを語るに対して、「燼餘録」の方は、大学卒業を1年足らず後に控えて学業を放棄させられた香港陥落について語っており、自分の身勝手さや友人たちのエピソードでカムフラージュしながらも、この一文を日本占領下の親日的な雑誌『天地』に寄せたこと自体に、政治とか思想を越えた人間存在もしくは物書きとしての張愛玲の真面目があるように思われる。

D項は日常生活における作者の生活者としての態度がうかがえると同時に、文章を書く人間としての感性のあり方が知られて、興味深い。ワン・ポイントのエピソードを綴る「夜宮的喇叭」「雨傘下」は数行だけの文字どおりの小品

だが、何気ない光景や物音にも神経を磨ぎすましている。そして作者の神経は言葉に対し、より敏感に反応する。「道路以目」は通りを歩いて次々に目に映る光景や、そこから連想される事柄について書きつらねていくのだが、そのきっかけとなったのは自分たちが普段見慣れて特別に感動することのない中国の子供たちについて、ある外国人女性が放った感嘆の言葉に触発されている。「愛」は、ある村娘が春の宵に裏門の所に立っていると、それまで話もしたことのない向かいの家の若者がつと近寄ってきて、「おや、あんたもここにいたのかい」と言う。話はこれだけで娘はその後妾に売られて転落していくのだが、老いてからもこのことをいつも懐しんだという話。このエピソードは作者の代表作「金鎖記」の中に盛り込まれている。「有女同車」はバスの中での女たちの話に耳をすましていると、恋人、夫、息子など、女というのは一生男とのしがらみから脱けられないと、作者に悲愴感を与える話。「説胡羅蘭」もある日の食卓に上った人参スープを目の前に、おばと人参の昔風の呼び名やそれにまつわる祖母の思い出を語り合うという話。こうした細細した例は、物書きの業さえ感じられる。言葉に対する彼女の感性の置き所を最もよく表わしているのが、「炎櫻語録」だ。張愛玲の親友であるセイロン人女性ファティマ（中国名：炎櫻）が何気なく語った言葉をひたすら羅列している。ここには、外国語と中国語、外国人世界と中国人世界の境界にいて、時としていずれもの世界から自由になることのできた彼女たちの、機知や調刺がうかがえる。

このように日頃から見聞きしたことを文章化していく習慣は、かなり幼ない頃から養われていたらしく、彼女の職業作家意識を媒介として、例えば『伝奇』などに採られた創作として結実していったと言えよう。

Ⅲ 張愛玲・1943～45年

ところで『伝奇』や『流言』に代表される時

期、すなわち張愛玲の作家としてのスタートから日本敗戦により、環境条件が全く変わってしまう時まで、彼女の作品外での生活はいかなるものであったのだろうか。

すでに見たように、英文誌《The XXth Century》に評論が掲載されるようになった1943年、張愛玲はそれまでに書きためてあったのかもしれない小説原稿を、次々に色々な雑誌に持ち込む。春まだ肌寒い頃に『紫羅蘭』の周瘦鵬を訪れ、その結果が同誌5月号の「沈香屑第一炉香」になったこと、7月には『万象』の柯霊の所に売り込みに行き、8月号に「心経」が掲載されたことは先に紹介した。汪政権につながると思われる『雑誌』や『天地』にはどういう経路で近づいたか、今のところ不明だが、『雑誌』には7月号の「茉莉香片」から始まって、中篇の「傾城之恋」「金鎖記」などが次々に発表されているので、やはり1943年の前半あたりに何らかの接触があったものと考えられる。『雑誌』から『天地』や『古今』⁽²¹⁾への発展は、重複している人脈からすれば当然の成り行きであったろう。そして1944年の旧正月頃ではないかと思われるが、胡蘭成と知り合い、二人の関係は胡が漢奸狩りを逃れて浙江省の農村に潜伏する日本敗戦まで続き、1947年6月頃正式に訣別したことが、胡蘭成の著書⁽²²⁾によって知られる。張愛玲と胡蘭成の関係については筆者はすでに論じているので⁽²³⁾、ここでは繰り返さない。胡は『雑誌』1944年5月号と6月号に「評張愛玲」を、『天地』1945年6月号に胡覽乘（胡蘭成と同音）の名で「張愛玲与左派」を寄せた。

張愛玲はしばしば『雑誌』主宰の座談会に出席しており、その記録は『雑誌』に掲載されている。今までの資料で知られるのは、1944年3月16日の女性作家懇談会に出席、当時上海で活躍していた女性作家たちとともに、出版社側のリードによって文学観などを披露している。ここでは1938年の英文紙に散文を寄せたこと、中国語の処女作は「天才夢」であること、中国の女性文人では宋の詞人李清照と同世代の蘇青を、外国の女性作家ではステラ・ベンソンを好むこ

とや創作論を語り、好きな読み物としてS・モーム、A・ハックスリーの小説、近代西洋劇、唐詩、小新聞、同世代の鴛鴦蝴蝶派の代表張恨水をあげている。

また同年8月26日には、出版されたばかりの『伝奇』を合評する茶話会が開かれた。他誌の編集者や作家、文学史家など書面で意見を寄せた者も含めて十数人が、『伝奇』および張愛玲文学の特長や欠点について意見を出した。主宰者の雑誌社が出した本であり、社の性格、出席者の傾向が一致しているの、立場の問題云々などはないが、文学技巧上のことではかなり鋭いところまで突かれている。

この頃になると、すっかり「時の人」となったらしく、弟や高校時代の恩師までが、彼女の素顔や思い出について語ったりしている。また1944年暮から正月にかけては、本人の脚本化により、「傾城之恋」が舞台上で上演された。脚本化に当っては、自身そのことをよくする柯霊などの協力もあったようだ。

ところで、先程述べた2度の座談会については、直接文学に関係しており、それなりに意味のあることだと思うが、1945年4月9日の他の女性作家たちと折から上海を訪問中の、朝鮮舞踊家崔承喜に会いに行ったことや、同年7月21日の納涼会に至っては、李香蘭や川喜多長政ら満映関係者に加えて日本軍の関係者も顔を見せており、『雑誌』の体質と背後の露骨な意図が明白である。ちなみにこの席で張愛玲はたいした発言していないが、李香蘭の方は自分が日本人であることを告白すべきではないかという煩悶があったらしく⁽²⁴⁾、言葉も澀みがちだ。彼女の正体を知っていたらしい中国人出席者の言葉とのからまりに虚々実々が感じられ、すこぶる興味深い。この記録が『雑誌』誌上に載ったのが1945年8月、日本敗戦の時であることを考えると、張愛玲も実際かなりきわどい所に立っていたことが分る。

本論で取り上げている『流言』はこうした流れの中で生まれた。張愛玲自身が自己の危うさ、すなわち時代が変わった時、漢奸（売国奴）と

して自民族から指弾を受けることに注意を払っていたかについては、筆者はこれまでの拙稿の中でいくつか指摘してきた。つまり1つは、私生活と文学活動もしくは作品とは別個のものという明確な信念をもっていたらしいこと。2としてはその表われでもあろうが、汪精衛政権（中華民族にとっての売国政権）中の人物胡蘭成との関係を、自己の著作の中にほとんど記していないこと。3には本論の考察からも見てとれるとおり、親日隊列以外すなわち柯霊に代表される抗日隊列とも交流はあったことなど⁽²⁵⁾があげられる。これらがどれほど自覚的意図的なものであったかよく分らないが、張愛玲にしては珍しく躍起になっている「伝奇増訂本」の序の申し開きや、後述するように、共産主義体制になることを見越した作品を書いたりもしているのを見ると、時代を見つめていたことは分る。

いったい彼女は自分の生きているその時代をどう捉えていたのであろうか。『流言』の何篇かにその片鱗を求めると、

この時代は古いものが崩壊し、新しいものが育ちつつある。しかし時代の高潮の到来する前は、快刀乱麻を断つような事物というのは例外だ。人々はただ日常の全てが何か違っている。恐しくらいに、と感じている。人間はある1つの時代に生活するものだ。しかし、今のこの時代は影のように沈みつつあり、人間たちは自分らが見棄てられたように感じている。

先にも論じた「自己的文章」の中で、張愛玲は時代をこう規定し、それ故に人々は自己の存在証明を求めて過去にしがみつき、周囲の現実と不協和音をたてているとする。また香港陥落のことを書いた「燼餘録」では、

時代の車が地響をたてて前進する。私たちは車に乗っていて、よく知っている通りばかりを走っているかもしれないのに、満天の火

の手の中で思わず驚き動転してしまう。惜しいかな、私たちはひたすら慌しくかすめすぎていく店舗のショウウィンドウの中に自分たちの影を探している——私たちは自分たちの顔が青白く、ちっぽけなものであることに気がつく。私たちの身勝手さと空しさ、私たちの恥知らずな愚かさ——みな誰もが私たちと同じだ。だが私たち一人一人はみな孤独だ。

「伝奇再版序」では、自分の本の出版を急ぐことに掛けて、

はやく、はやく、遅れたら間に合わない！
たとい個人は待たたとしても、時代の方は慌しく進んでいく。すでに破壊の最中にあり、更に大きな破壊が来ようとしている。いつかある日、私たちの文明は昇華するにせよ、浮華（軽薄化）するにせよ、全て過去のものになってしまうのだ。私の最もよく使う言葉が「荒涼」だとすれば、それは思想背景の中に漠然とその脅威があるからなのであろう。

これらの言葉のうちに、時代の大洪水な中でなすすべのない人間を見据える眼が感じられるが、作品の上で冷徹にそれを描き出していった彼女も、先に記したように、実生活の面ではやはり流されていたと言える。

1947年に出版された「伝奇」増訂本の前書き「読者への言葉」について、筆者はかつて漢奸になることを免れ得たと捉えたが⁽²⁶⁾、劉心皇は容赦がない。彼ははじめ「關於張愛玲」という文章の中で彼女の件の申し開きをこう評した。

彼女の散文と小説については、文章も内容もともに秀れ、欠点はごくわずかだ。悲しむべきは彼女が抗日戦争の時期に大後方（国民党支配区）に行かず、日本占領下の上海に残り、抗日戦争の事業に従事する人たちと連絡をとることなく、終日偽組織（汪政権）の幹部たちと一緒におり、ましてやその中の一人と同居生活を行ったことだ。これは特に注意

すべき点だ。彼女は文字の上では彼らの宣伝をすることはなかったが、政治上の立場から言えば、問題がないとは言えない。国事多難の時には是非を明らかにし、忠か奸かははっきりさせなければならない。彼女が天才だ、文才があるなどと言って、これほど大事なことを、曲げて許してしまうわけにはいかない。今の若い人たちは抗日戦争時代の悩み苦しみを知らないから、人物評価の際あるいはこの点が疎かになるのかもしれない。

そして上記の一段を引用した『抗戦時期論陥区文学史』（前出）の中では、「この言葉はかなり遠慮して言っているのだ」と受けながら、漢奸たちと付き合いがあり、『新中国報』や『雑誌』など汪政権に関係のあった部分と係わり合いをもったことに対して深く反省し、「歴史の大義や民族の節操の前に懺悔すべきだ」と強い論調で述べている。

文化漢奸を巡る彼女のあり方については、筆者はすでに論じているので、ここでは深く触れないが、例えば当時上海にいた竹田泰淳は当然断罪されると考えていた節があるし、堀田善衛も小説の登場人物の名前の使い方にその可能性が窺えたりする。

こうした立場の問題も1つではあるが、張愛玲の文学そのものにとって、この時期はどんな意味があったのだろうか。彼女の立場には批判的ながら、その才能を惜しみ、好意的でさえある柯霊は、「中国では1910年代の新文学運動以来、文学と政治は切り離せないものと考えられ、それに合わないものは存在できなかった。それは祖国と運命を共にするという長所をもつ一方で、文学の領域を狭めてきたことも確かだ。この気風の中に張愛玲の占める位置はない。しかし上海陥落により、新文学の伝統が断ち切られた。ただ日本という侵略者と汪政権に反対しさえしなければ、どんなものでもよかった。そこに非政治的な張愛玲の文学が花開く余地があった⁽²⁷⁾」とし、彼女の文学生涯の輝しい時期はこの2年間（1943-45）しかなく、それが幸か不

幸かは何とも言えないところだと述べている。

張愛玲は日本敗戦後しばらくは映画の脚本などを書いていたらしいが、1948年頃になると、上海で愛憎の泥沼を経て男女が東北支援に向かうという結末をもつ「十八春」や、虐げられながらも新しい型の労働者の愛に救われていく女性を描いた「小艾」を書いて、来たべき人民中国に身を置くべく努力したようだが、人民共和国の成立とともにやがてその体制に自ら馴染むことの不可能を痛感し、香港へと脱出する。そこで反共小説「赤地之恋」や「秧歌」を書き、1950年代半ばさらにアメリカへ渡って行く。アメリカでは翻訳などをしながら創作活動を開始し、「五・四遺事」などを発表するうち、アメリカ在住の中国人研究者夏志清によって高く評価され、その後の台湾での人気につながった。

しかしながら、その後の台湾やアメリカ、近年の大陸での研究や出版状況を見ても、柯霊が指摘したように、1943～45年が張愛玲にとってまさに燦然と輝く特別な時期であったことは否めない。「十八春」や「小艾」の時には共産主義が、「秧歌」や特に「赤地之恋」の場合には反共ということが、アメリカ移住後はアメリカ社会に受け入れられるということが、自己に課した第1課題であったろうと考えられる。たとい親日的な雑誌に寄稿したにせよ、上海時代の彼女が中国語で小説を書く時、日本側に受け入れられようと考えたとは思われない。上海人に気に入ってもらいたいという気持ちは強かったようだが、その意味で、書き手としては一番自由であった時期とも言えるのではないだろうか。こう考えてくると、虚構性の度合いの高い小説、それらの集成である『伝奇』よりも、作者自身が主人公である『流言』の方がより一層彼女の本音をさらけ出しており、本質が見えやすくなっていると思われる。『流言』という表題のつけ方には、斜に構えた、ある種の逃げが感じられないわけではないが、とにかく、それは時間的に言っても、彼女の職業作家としての出発点であったのである。

おわりに

筆者は最近アメリカで、彼の地の大学における現代中国文学史の講義用アンソロジーを複数日にする機会があった。魯迅や茅盾などと並んで張愛玲も項が立てられていた。これは大陸の関連の書には見られないことであり、1956、7年頃、はじめて彼女を評価した夏志清に負うところが大きいのだろうが、Exile（亡命作家）という項目立ての中にアメリカらしさを感じる。張愛玲が一時期籍を置いていたカルフォルニア大学バークレー校の中国研究センターも訪れたが、彼女のことを知る人もなく、同校内の東アジア・センターで幾分の情報と資料を得た。彼女がそこにいたのはある教授（陳世驥）の引きで、1年足らずの間であったこと、現在カルフォルニアのどこかにいる（1982年時点ではロス・アンジェルスに居た）が、相変わらず人を避けて暮しているらしいということだった。

筆者にとって新しく得た資料は王拓『張愛玲与宋江』（台中藍燈文化事業有限公司 1976年3月）のみであったが、中に、本論で取り上げた『流言』に関する「紹介—本散文—『流言』」という文章があって、参考になった。所収作品の分類の仕方など私案と共通するところがあって心強く思う反面、出鼻をくじかれた感のあることも否めない。ただし本論では作者の創作姿勢を基準としたので、各項目の内容には異同がある。

1943～45年の間に書かれた随筆評論の類で『流言』にとられていないものも多少あり、本来はそれらも含めて論ずべきであったかもしれないが、煩を避けて最小限に留めた。張愛玲の文学人生の中で一際光彩を放つこの時期については、さらに細かな事実関係はもとより、つとに指摘されている「紅樓夢」や欧米文学との関連、本人も自覚し巧みであった文学技巧や修辞法の上からも、個々の作品について更に深く検討されるべきだと思う。今回は事実関係のかなり表相の部分に終始した気味があるので、今後の課題としたい。

注

- (1) 拙稿「張愛玲と『伝奇』——中国と西洋の接点」『共栄学園短期大学研究紀要第4号』1988年
- (2) 同上 P. 33
- (3) 汪宏声「記張愛玲」原載『語林』月刊第1期, 1944年12月, 後に唐文標他編『張愛玲資料大全集』台北, 時報文化出版事業有限公司1948年6月に収録 P. 253~259
- (4) 張愛玲『張看』台北, 皇冠出版社 1976年5月および注(3)の『張愛玲資料大全集』に収録.
- (5) 鄭樹森「張愛玲与『二十世紀』」雑誌『聯合文学』第3巻5期, 1987年3月 P. 82~85
- (6) (1) P. 32
- (7) 劉心皇『抗戦時期淪陷区文学史』台北, 成文出版社 1980年5月 P. 30
- (8) (7) P. 5
- (9) 迅雨「論張愛玲的小説」唐文標『張愛玲雜碎』台北 聯経出版 1978年7月 付録P. 115その他に所収.
- (10) (7) P. 34
- (11) (7) P. 169
- (12) 柯霊「遙寄張愛玲」多数の書物に収録されているが, 今回は(5)の『聯合文学』を参照. P. 86~91
- (13) 胡蘭成『今生今世』(名古屋・ジャーナル社 上・1958年12月 下・1959年9月)
- (14) (12)参照
- (15) 鄭振鐸: 1899~1958 現代中国文学史家, 編集者. 浙江省永嘉県生まれ. 抗日戦争中は文学者の組織「中華全国文芸界抗敵協会」の理事をつとめ, 上海陥落後は, 魯迅夫人許広平らと出版団体を組織して, 『魯迅全集』や『レーニン選集』などを出版した.
- (16) 葉聖陶: 1894~1989 作家, 名は紹鈞で, 聖陶は字. 蘇州生まれ. 児童文学の作品も多く, 「稻草人」や「倪煥之」(日本語訳「小学教師」)などが有名.
- (17) 1945年1月出版という説や他社出版説もあるが, 筆者手持ちの復刻版(上海書店影印出版 1987年3月)に依った.
- (18) (13)参照
- (19) (9)参照
- (20) (12)参照
- (21) 『古今』: 半月刊. 上海古今出版社発行, 1942年3月創刊. 執筆者には汪精衛, 周仏海, 陳公博らをはじめ, 汪政権関係者のかなりの人たちの名が上っている. 張愛玲は《The XXth Century》に寄せた英文の評論を中国語に訳し, 当該誌に掲載した. 「洋人看京劇及其他」や「更衣記」などがそれである.
- (22) (13)参照
- (23) 拙稿「張愛玲と胡蘭成——“漢奸”をめぐって」20世紀文学研究会編『文学空間』II—9 1989年7月
- (24) 山口淑子『李香蘭 私の半生』新潮社 1987年7月
- (25) (23) 参照
- (26) 同上
- (27) (1)参照. P. 30. (12)の該当部分を要約した.

付録1

張愛玲年譜(第1稿)

年	事項	備考
1920	9月30日上海に生まれる。母は南京の門閥の出。父方の祖父は清末の名臣張佩綸、祖母は李鴻章の娘と言われる。	
(1922) 2歳	父の仕事の都合で天津へ移る。その間、母は洋行、父の妻が同居する。1歳違いの弟あり。	
(1924) 4歳	私塾教育を受け始める。	
(1928) 8歳	上海へ戻る。	
	母帰国。 両親協議離婚。母フランスに旅立つ。	
1931	聖マリア中学入学、寄宿舎生活へ。 作文：「遅暮」(中2) 「論卡通画之前途」(高3) “Sketches of Some Shepherds” “My Great Expectations” 英文2編は卒業文集“The Phoenix”《鳳藻》1937年所収	
1937 17歳	聖マリア中学卒業。 母、帰国。この頃、父親により監禁に遭う。	7/7 日中戦争始まる
1938 18歳	香港大学入学。 この頃、英字新聞に英文のエッセイを寄せる。	
1939 19歳	『西風』の懸賞に応募して、「天才夢」を書く。	
1940 20歳	『西風』4月16日号に「天才夢」が掲載される。	
1941 21歳	12月香港陥落のあと、大学堂臨時医院で負傷者の看護に当る。	12/9 太平洋戦争始まる 12/25 香港陥落
1942 22歳	上海に戻り、おばと暮らす。静安寺路赫徳路192号公寓6F65号室。 聖ジョージズ大学を受けるが、中国語が不合格のため補習班に入ったという説もある。	
1943 23歳	1月“Chines Life and Fashion”『20世紀』1月号 春、『紫羅蘭』の編集長周瘦鵬に会いに行く。 5月、“Wife, Vamp, Child”『20世紀』5月号 「沈香屑第一炉香」『紫羅蘭』5月号 6月、“Still Alive” “The Opium War”『20世紀』6月号	

1944
24歳

「沈香屑第二炉香」『紫羅蘭』6月号
 7月、『万象』の柯靈に会いに行く。
 〈「秋歌」「烏雲蓋月」の映画評〉『20世紀』7月号
 「茉莉香片」『雜誌』第11卷4期
 “Mothers and Daughter-in-law”『20世紀』8, 9月合併号
 8月「到底是上海人」『雜誌』第11卷5期, 「心経」『万象』,
 9月「心経(続完)」『万象』第3期, 「傾城之恋」『雜誌』第11卷
 6期
 10月〈「万紫千紅」「燕迎春」の映画評〉『20世紀』10月号
 「傾城之恋(続完)」『雜誌』12卷1期
 11月“Chima: Educating the Family”『20世紀』11月号,
 「金鎖記」『雜誌』12卷2期, 「封鎖」『天地』2期, 「琉璃瓦」
 『万象』5期
 “Demons and Fairies”『20世紀』12月号, 「公寓生活記趣」
 『天地』3期, 「全鎖記(続)」『雜誌』12卷3期, 「洋人看京劇及
 其他」『古今』半月 33期, 「更衣記」『古今』34期
 1月ごろ胡蘭成と知り合う。
 「道路以目」『天地』4期, 「連環套」『万象』7期
 2月「燼餘録」『天地』5期, 「連環套(続)」『万象』8期, 「年
 青的時候」『雜誌』12卷5期
 3月16日, 『女作家懇談会』に出席。於新中国報告社社宅。「談女人」
 『天地』6期, 「連環套(続)」『万象』9期, 「花凋」『雜誌』12卷
 6期
 4月「論写作」「小品三則(愛・有女同車・走, 走到樓上去)」、「女
 作家懇談会」以上3篇とも『雜誌』13卷1期, 「連環套(続)」『万
 象』10期
 5月「童言無忌」「造人」以上2篇『天地』7, 8期合併号, 「連環套
 (続)」『万象』第3年11期, 「紅玫瑰与白玫瑰」『雜誌』13卷2期
 6月「打人」『天地』9期, 「連環套(続完)」『万象』12期
 「紅玫瑰与白玫瑰(続)」『雜誌』13卷3期
 7月「說胡蘿蔔」『雜誌』7月号, 「自己的文章」『新東方雜誌』7
 月号, 「私語」『天地』10期, 「紅玫瑰与白玫瑰(続完)」『雜誌』
 13卷4期
 8月26日, 『伝奇』合評茶話会に出席。於康樂酒家。「詩与胡說」
 「写甚麼」『雜誌』13卷5期,
 「中国人的宗教」『天地』11号
 9月, 『伝奇』初版, 再版出版(上海街燈雜誌社)「中国人的宗教
 (続)」『天地』12期, 「忘不了的画」「『伝奇』集評茶話会」記事,
 以上2篇とも『雜誌』13卷6期, 「散劇」「炎櫻語録」『小天地』第
 1期

迅雨「論張愛玲の小説」
 『万象』11期
 胡蘭成「評張愛玲」
 『雜誌』13卷2期
 胡蘭成「評張愛玲」
 『雜誌』13卷3期
 柳雨生「說張愛玲」
 『風雨談』月刊10月号,
 張子静「我的姊姊張愛
 玲」『颯』10月号

	10月、「中国人的宗教（続完）」『天地』10月号、「談跳舞」『天地』13期、『苦竹』第1期	
	11月「段宝澧送花楼会—「列女伝」之一」『雜誌』14卷2期	譚正壁「蘇青与張愛玲」
	12月、『流言』出版、中国科学公司	『雨風談』11月号
	12月～1月、「傾城之恋」話劇公演	汪宏声「談張愛玲」
	「自己的文章」「桂花燕阿小悲秋」ともに『苦竹』第2期、「等」『雜誌』14卷3期	『語林』月刊第1期
1945	1月「氣短情長及其他」『小天地』第4期	許季木「評張愛玲的流言」『雜誌』1月号
25歳		「每月小説介紹『傾城之恋』」『文潮』月刊1月号
	2月「『卷首玉照』及其他」『天地』17期、「留情」『雜誌』14卷5期3月、「双声」『天地』18期、「蘇青与張愛玲對話記」「創世紀」ともに『雜誌』14卷6期	
	4月9日、崔承喜および上海の女性作家との談話会に出席。於華懋飯店8階3号室	
	「吉利」「創世紀（続）」『雜誌』15卷1期、「我看蘇青」『天地』19期、「秘密」『小報』4月1日号、「大人的心」『小報』4月3日号	
	5月「姑姑語録」『雜誌』15卷2期、炎櫻「女装・女色」張愛玲訳『天地』20期	
	6月「創世紀（続完）」『雜誌』15卷3期	胡覽乘「張愛玲与左派」『天地』
	7月21日、納涼会に出席。	
	炎櫻「浪子与善女人」張愛玲訳『雜誌』15卷4期	
	8月「納涼会記」『雜誌』15卷5期、	8/15 日本敗戦
1946		
26歳	2月、温州で潜伏中の胡蘭成に会う。	
	「華麗縁」『大家』月刊創刊号	
	5、6月「多少恨」『大家』2期、3期	
1947	上海電影公司のために映画の脚本を書く。	
27歳	6月ごろ胡蘭成と正式に訣別。	
	『伝奇』再版、上海山河図書公司	
1948	梁京のペンネームで「十八春」のちに「小艾」を書く。ともに『亦報』連載。	
28歳		
1949		10/1 中華人民共和國成立
29歳		
1951	1月、『十八春』単行本出版、中国科学公司	
31歳		
1952	第一次文学芸術界代表大会（上海）に出席。	

32歳	香港に出る。 “美国新聞処” (American Information Center) で働く。	
1954	「秧歌」「赤地之恋」『今日世界』に掲載、単行本化。	
34歳	香港にて『張愛玲短編小説集』天風出版社を出版。10月25日づけで、 香港からアメリカの胡適に『秧歌』を送る。	
1955	1月25日づけ、胡適の返事。2月20日づけ張、再度胡に手紙を書く。	
35歳	秋、クリーヴランド大統領号で香港からアメリカへ。 11月ニューヨークで、ファティマとともに胡適を訪問。 のちにファティマの知り合いのいる救世軍の“職業女子宿舎”に住む。 胡適もここを訪ねている。	
1956	2月、Edward MacDowell Colony の奨学金を得て、Colony の ある New Hampshire 州 Peterborough へ行く。	
36歳	8月、Colony で知り合った Ferdinand Reyher (1891年生まれ) と結婚。ニューヨークに住む。 この年、「五四遺事」を英文で発表、1957年に中国語版。脚本「情場 如戰場」、舞台劇「The Tender Trap」の改編などをする。	
1957	この頃、夏志清張愛玲を評価する。	夏志清「張愛玲的短編 小説」「評『秧歌』」
37歳		胡適、台湾へ。死去の 消息
1958	カリフォルニア州“享亭屯・哈特福基金会”へ半年間行く。(胡適に保 証人を依頼)	
	「五四遺事」台北『文芸雑誌』 (ボストン在住)	
1961	取材のため、台湾香港へ。台湾滞在中に夫 Reyher が中風で倒れた という連絡を受ける。	
41歳	香港で映画製作に関与。「南北一家親」1962年10月上映。	
1963	映画「小兒女」10月2日上映。	
43歳		
1964	映画「一曲難忘」7月上映、「南北喜相逢」9月上映	
44歳		
	この頃 Reyher 半身不随。 「怨女」香港『星島晚報』	
46歳	Reyher 死去。76歳。	
1967	ケンブリッジの“雪克里英(ジャクリーヌ)女学校”の在学作家とな る。	
47歳		
1968	「憶胡適之」香港『明報月刊』 2月～7月、「網然記」台北『皇冠雜誌』に連載。 のちに「半生縁」と改む。	
48歳	12月、「紅樓夢未完」台北『皇冠雜誌』	
1969	カリフォルニア大学バークレー校中国研究センターに陳世驥教授の紹 介で在職。夕方、出勤。	
49歳	『張愛玲短編小説集』『流言』『秧歌』『怨女』いずれも台北・皇冠	

	出版社	
1971	2月, ハーバード大教授, James Lyon, プルーストのことで情報を 51歳 得ようと接触を試みるが, 不成功. この頃, 陳世驥教授死去. 6月, 水晶, 単独会見に成功.	
1973	ロス・アンジェルス在住. 53歳 「初詳紅樓夢—論全抄本」台北『幼獅文芸』3月号 「連環套」「卷首玉照及其他」炎櫻「浪子与善女人」 張愛玲訳, すべて『幼獅文芸』6月号 「創世紀」台北『文季』	
1974	「談看書」「談看書后記」ともに台北『中国時報』 54歳 『人間』副刊	
1975	「二詳紅樓夢～論程之本」『皇冠雜誌』 55歳	
1976	「張看自序」台北『聯合報』副刊2月 56歳 5月, 『張看』皇冠雜誌社 「三詳紅樓夢～是創作不是自伝」『聯合報』 8月	
1982	62歳 ロス・アンジェルスで「華麗縁」の修訂をする.	
1987		2/3 王禎和, テレビ のインタビューに答え て, 1961年に張が訪台 した時の思い出を語る. 丘彦明「張愛玲在台湾」 参照

(注)

- (1) 事項, 備考欄とも1943～45年に重点をおいた.
- (2) 生年については1921年という説もあるが, 鄭樹森の説に従った.
- (3) 依拠した資料に年号のないものは推定年号に()を付した.

付録2

『流言』所収作品初出刊行物一覧表

作品タイトル	初出刊行物	分類	備考
童言無忌	『天地』第7, 8期 1944年5月	C	
自己的文章	『苦竹』第2期 1944年11月	B	
公寓生活記趣	『天地』月刊第3期 1943年12月	D	
夜宮的喇叭		D	
代也正名乎	『雑誌』第12巻第4期 1944年1月	A-2	
燼餘録	『天地』第5期 1944年2月	C	
到底是上海人	『雑誌』第11巻第5期 1943年8月	A-2	
道路以目	『天地』第4期 1944年1月	D	
更衣記	『20世紀』4巻第1期 1943年1月	A-1	原文英語, 後に『古今』半月刊
愛	『雑誌』第13巻第1期 1944年4月	D	もと「小品三則」の1つ. 第34期, 1943年12月に中国語訳.
談女人	『天地』第6期 1944年3月	A-1	
借銀燈	『20世紀』4巻第5期 1943年5月	A-1	原文英語
走! 走到樓上去	『雑誌』第13巻第1期 1944年4月	B	もと「小品三則」の1つ
銀宮就学記	『20世紀』5巻第5期 1943年11月	A-1	
洋人看京劇及其他	『20世紀』4巻第6期 1943年6月	A-1	原文英語, 『古今』半月刊第33期. 1943年11月中国語訳.
說胡蘿蔔	『雑誌』13巻4期 1944年7月	D	
炎櫻語録	『小天地』創刊号 1944年8月	D	
存稿		B	
写甚麼	『雑誌』13巻5期 1944年8月	B	
造人	『天地』第7, 8期 1944年5月	A-2	
打人	『天地』第9期 1944年6月	A-2	
詩与胡說	『雑誌』13巻5期 1944年8月	B	
有女同車	『雑誌』13巻1期 1944年4月	D	もと「小品三則」の1つ.
私語	『天地』第10期 1944年7月	C	
忘不了的画	『雑誌』13巻6期 1944年9月	A-1	
雨傘下		D	
談跳舞	『天地』第14期 1944年11月	A-1	
談画		A-1	
伝奇再版序		A-2	
談音楽	『苦竹』第1期 1944年11月	A-1	

※序列は目次に従う.